

## 生涯二度の竈処理かまじ

茨城県 篠崎 正卓

一 父母の渡満にいたるまで  
我が家の先祖は代々薩摩藩に示現流の一派の、  
水野流剣術指南役として仕えていた城下士である。  
これが土地持ちの外城士（郷士）であれば、一族  
の運命は大きく変わっていたと思う。

「戊辰の役ぼしん えき」には、官軍として曾祖父の七郎左  
衛門正春は、長男で十八歳の七郎兵衛正大まさひろを連れ、  
薩摩四番大砲隊監軍として長岡・会津と転戦し、  
東京から無事に凱旋した。

その後、明治十（一八七七）年の「西南の役」  
には、残念ながら一族挙げて賊軍として参加する  
破目になった。元近衛兵軍曹の大伯父正大は家督  
を継ぎ、薩軍きつての精鋭である桐野利秋率いる  
四番大隊二番小隊分隊長として、弟の中七郎正直、

（私の祖父で当時十八歳）を連れ出陣した。古く  
からの豊前街道が通る熊本県山鹿市長野原で、官  
軍と砲火を交え「田原坂」に劣らぬ激戦が展開さ  
れた。中七郎は長野原の戦場で右膝関節に銃弾を  
受け後送され、鹿兒島に戻り療養、一命は取り止  
めたが生涯足が不自由になってしまった。その後、  
正大は小隊長となり豊後・日向方に転戦し、最後  
は延岡近くの可愛岳えのだけの重圍じゅうゐ突出し、鹿兒島に向か  
い落ち延びる途中、官軍に捕縛された。そのため、  
城山での討死は免れたが、「賊徒二組シ小隊長ト  
ナリ、兵ヲ指揮セル罪」により懲役三年の刑を受  
け服役した。

曾祖父正春は隠居の身であったが、薩軍戦況不  
利により編成された後発隊監軍として各地に転戦  
し、負傷帰郷したが、官軍に拘引せられ獄中にて  
病死した。

祖父の中七郎にはお咎めはなかったが、兄正大  
の服役中に兄嫁の目をかすめ、実家より多額の金  
品を持ち出し出奔しゅつぽんし、宮崎県南那珂郡にて石山を

購入、セメントの原石を掘り出す仕事を始めたのだった。しかし所詮は「武士の商法」で、最後には倒産した。その間、滞在していた旅籠の娘と所帯を持ち二人の男児を儲けたが、中七郎の次男である私の父正八が、六歳の明治三十六年に所帯を畳み鹿児島に帰り、正大に詫びを入れた。正大に怒鳴られ叱られている間、父は側で震えていたという。これが一度目の「竈処理」である。

中七郎一家は鹿児島市内の長屋に落ち着き、生活の糧として長屋の住民相手に小商いを始めた。推測するに中七郎は何もせず、すべて妻任せの商いであったと思う。貧困の中に育った正八は、やがて小学校高等科を終え国鉄の駅に勤め始めた。しかし、先に満州に渡っていた兄正七の「満州は良い所だ、父母を連れ渡満せよ」との言い付けにより、父は二度目の「竈処理」をし、祖父母を連れ大正三（一九一四）年に渡満し、南満州鉄道株式会社ホンケイコの安奉線本溪湖駅に駅手として勤務を始めた。

母さつゑは、明治三十一年に大分県高田町（今の豊後高田市）の農家の二男三女の末娘として出生した。外祖父の出身は農家の三男であり、当時としてはどこにでもいる水呑五反百姓であった。やがて、祖父は農器具の製造販売修理の「鍛冶屋」を始めたので、母はろくに小学校にも行けなかった兄姉よりは、いくらかは恵まれた境遇に育つたと言えよう。

町の桂陽小学校高等科を卒業後、小倉の市立病院付属看護婦学校に入学した。大正四年、看護婦となった母は先輩の世話で渡満し、大連満鉄病院に勤務を始めた。四平街満鉄病院を経て、本溪湖満鉄病院に勤務中、そこで世話する人があって、本溪湖駅勤務の父正八と大正十年に結婚した。思うに兩人共に、庶民として貧乏な日本にいるより少しはましな生活、ささやかな幸せを求めて渡満の道を選んだと言えよう。

## 二 戦前の生活

一般に満鉄社員の給料は、内地のサラリーマンより良かった。通常、奉天（瀋陽）付近で五割増しの在勤手当が付き、北滿の僻地に行けば手当ではもっと高額になる。社宅は無料、満鉄消費組合での物資の購入、有利な社内貯金、健康保険制度、鉄道家族パスなどもあり、福利厚生制度は概ね完備していた。子弟に中等教育を受けさせることは勿論可能で、内地の大学に進学する満鉄社員の子弟も大勢いた。

昭和十一（一九三六）年に満州国に返還するまでは「鉄道付属地」は満鉄が経営していた。奉天には赤レンガ建でスチーム暖房の瀟洒な満鉄経営の小学校・中学校・女学校があり、不燃建築なので内地のように校舎と別に独立した奉安殿はなかった。御真影は校長室に保管されていて、登下校時には校門の所で校長室に向かって最敬礼をするきまりになっていた。冬はスケート、夏には大連の星ガ浦や夏家河子の海浜学校、熊岳城温泉の林

間学校、小学五年生で大連・旅順、六年生で朝鮮への修学旅行、昭和十四年女学校卒の姉は三週間にもわたる「日光」までの内地修学旅行に行った。ちなみに、私と弟には修学旅行の経験はない。小学校は戦局の悪化により中止、戦後の中学・高校時代は貧乏暮らしのため参加できなかった。私が小学一年生の昭和十四年以前は、関東州産のリンゴを大籠で買い、ロシアケーキ、ロシア飴、チョコレートと和洋の菓子類も豊富で、生活の楽な時代でもあった。

奉天市内には公園、野球場、テニスコート、国際グラウンド、プール、映画館、百貨店、病院などの諸施設があり、碁盤の目に仕切られ舗装された街路、市内電車、乗合バス、タクシー代わりの洋車（輪タク）、馬車が走り、上下水道・都市ガスも敷設されていた。当時はまだ電化製品の普及はない時代だが、ラジオ、電熱器、ミシン、アイロン、カメラなどは一般家庭に普及し、父専用ではあったが満鉄のダイヤル式自動電話も引かれていた。

昭和十五年、内地と同様に物資統制令により、すべての物品が満州でも配給制となった。十五年を境にして満鉄自慢の冷蔵貨車輸送による、大連からの新鮮な魚介類は店頭から消えた。街頭の焼芋屋・落花生売りの満人は姿を消し、紙芝居屋、歳末の風物詩でもあったリヤカーに籠・臼・杵などの道具一式を載せて巡回する「賃餅つき」の人たち、奉天神社の祭礼の神輿、子供の喜ぶオマケがある越中富山の置き薬屋の巡回、秋季大掃除のときなどの楽しみだった蒸籠詰め「餃子」の出前など、すべてのものが消えていった。小学校の構内売店のパン類は販売停止となり、やがては物資不足で売店そのものが廃止されていった。

年々戦時色は満州でも深まっていき、代用食の「お八つ」も多く、甘い物には飢えた少年時代であった。育ち盛りの子沢山の我が家では、食べさせるのに母は苦勞が多かったと思う。一般庶民や満鉄下級職員の家では、やりくりに追われていたのが実情であった。しかし内地に比較すれば、

まだまだ生活物資の余裕はあったとは言える。両親とも実直な人で、まあ律儀者の子沢山だから、社宅の庭に家庭菜園を造り、鶏を飼い、少しでも始末をと心掛ける生活であったと言えよう。母は父から預かった月額五拾円ほどの家計費の中の余りを小額ながらも月々郵便貯金にしていた。敗戦により郵便局は消えたが、最後の入金が二十年の七月末で、下ろした跡の一度もない母の貯金通帳が、満州国の崩壊により無価値となってしまったが、証券類を戦後保管していた「横浜税関」から返却されて、実家に貴重な資料として残されている。

終戦時の家族と年齢は、父四十八歳、母四十七歳、専業主婦、姉二十三歳、高女卒で満鉄鉄道総局勤務、長兄二十歳で大連の高専在学中の二十年二月に牡丹江方面に現役入隊、次兄十八歳、商業卒で満州電業勤務、三兄十六歳で中学四年生、私十三歳で商業一年生、弟十一歳で小学六年生、次弟四歳の計九人であった。

### 三 朝鮮疎開

昭和二十年春、私は奉天葵在満国民学校を卒業し奉天商業に入学した。十九年十二月と翌年一月と、中国奥地の四川省成都を發進してきたB―29による奉天空襲は身近に被害もなく、小学校裏の原野に盲爆の爆弾穴を見に行った程度で、実際の戦火の恐ろしさについては何も考えない毎日であった。既に沖繩の死闘も始まり、戦況は断末魔の状態にあったというのに、思えば満州ではまだまだ呑気な日々を送っていたものだった。

新入学に当たり、当時の中学生の登校スタイルである戦闘帽・長ズボン・巻脚絆・靴などの品物を青葉町にある四階建てのデパート・満鉄消費組合本部に探しに行ったが、売り場に商品は何もなかった。入学してから配属将校曰く「巻脚絆は母親の着物の帯の中に帯芯がある、それを利用して作れ」と乱暴な話で、また長ズボンが手に入らず、半ズボンを継ぎ足して穿いてくる人もいた。兄の「お下がり」をもらえる私は、まだ恵まれていた

ほうだ。

六月二十三日、沖繩玉砕する。ラジオによる報道は二十五日であった。夕刻帰宅途中、通用門の所で朝鮮系日本人の金山君がラジオ放送を聞いていたのか、悲痛な声で「オーイ！ 沖繩が玉砕したぞ！」と告げてくれた。

教職員は五月と六月の関東軍の根こそぎ動員で校長以下三々四人のみ、六月からは二年生も勤労動員で登校せず、モールス通信の特訓、合併授業や配属将校による野外徒手教練が多く、柔剣道場には日本軍が一個中隊ほど駐屯し、少しずつ緊迫感があったような気もする。

八月十一日、その年は中学校には夏季休暇は無く、そのことは突然にきた。正午過ぎ学校から「満鉄社員の子弟は朝鮮に疎開することになったから、至急帰宅せよ」との指示があった。既に九日午前零時、ソ連軍の満州侵攻により、連日素掘りの防空壕に立ち木を切り倒して覆いおおを架けたり、校舎の屋根にある防空監視哨の偽装にと、作業の連続

の臨戦状態であった。父は二十年春より満鉄の子会社、国際運輸（内地の日本通運に相当）に出向していたので、満鉄社員の子弟ではないと自己判断をして作業を続け、七時ごろ帰宅した。

家の中は既に帰宅していた父の指図で、朝鮮に持って行く荷物の分別でゴった返していた。突然「朝鮮に行くのだ」と父に言われ、私はとつさに「俺は行かないよ」と言ってしまった。不服げな私を相手にせず、父は荷物の吟味に追われ出した。父は薩摩隼人で平素から寡黙な人であり、言わなくとも分かるだろうとの態度であった。何とも納得のいかない軍国少年の私は、「一死報国、疎開即敵前逃亡」の気持ちでいたので、「この俺が逃げるのか、それで良いのか」と思い、プイと家を飛び出し近所の学友の所に様子を確かめに走った。学友の家でも疎開の準備中で、学友の母親に「お父さんの言い付けに従いなさい」と諭され、夕飯を食べさせてもらい周囲の満鉄社宅の慌しさに何となく納得して、九時ごろ帰宅した。「どこに行つて

いたんだ！」と父に怒鳴られた。「お前がついて行かないで、母さんや弟たちをどうするつもりだ」と言われ不承不承ながらも承諾し、自分の学用品などの荷物を整理して就寝した。今思うと、父の気持ちはよく分かる。明日の命がどうなるのか分からないとき、もし自分は玉碎するようなことになったとしても、最愛の家族が生き延びられるとしたら、私も父と同じ行動をとることだろう。疎開には老人、家庭の母親、数え年十五歳以下の子供という制限があった。

八月十二日午前二時ごろ、寝たかと思うと起こされ、家族全員で深夜の奉天駅に向かう。駅のホームには大勢の人がいたが、混乱もなく秩序だつて行動していて、側壁もなくロープを張った貨車（フラット車）に乗り込む人たちもいた。永年鉄道員だった父は、乗り込むべき列車をいち早く調べてきて、私に有蓋貨車編成の列車に乗車の指示をした。団体疎開とかで、前部三両が国際運輸の家族の割り当て車両だった。なかなか汽車は出発

しない。太陽は既に相当に高く、ようやく十時ごろ、満員すし詰めの特快車に乗せ朝鮮に向けて出発した。

日ならずして奉天は戦火の巷となるのか、我が生誕の地、奉天の土をもう二度と踏むことは無いだろう、父兄姉とも今生の別れだと思いと、物心ついてから泣いたことの無かった私も、込み上げて来る嗚咽を堪えることはできなかった。家をたつとき、「あとのことば頼んだよ」との母の言葉に、「残るのもお国のため、朝鮮に行くのもお国のため」と奉天死守・職場死守の気持ちで、涙ながらに姉は答えたそうだ。

途中、空襲警報による運行待機もあるし、先行列車で前がつかえていて、大連方面に行くから戻るのだと、安奉線と連京線の分岐点の蘇家屯に向けて逆走をしたり、また朝鮮に行くのだと走行を開始したりした。安奉線は山岳線でトンネルが多く、暑い時期で、女子供では貨車の扉の開閉は簡単にはできずに開けたまま、機関車の吐く煤煙で

長いトンネルでは息が詰まりそうだった。トイレの設備は無く、前夜一睡もしていない母をはじめ、ほとんどの婦人が生理現象が恐ろしかったのか、飲まず食わずでじっとしていた。私は、頓着なく水筒のお茶を飲み「お握り」を食べ、生理現象も適当に停車時にした。既に先行列車の残した遺物で、線路の両側は足の踏み場も無い。ときとして機関車は切り離されて、側線の給水塔の所に行き給水するが、その時間は気持ちの余裕を持って行動することができた。水を汲みに行けば、四斗樽を据えて駅の人が手押し井戸ポンプを押し放しで、皆我勝ちに水筒を樽の中に直接突っ込んでいる有様だった。通常なら安東まで二八〇キロメートル、とつくに到着するはずが、遙か手前で日はとつぷりと暮れてしまった。

八月十三日、夜中に朝鮮に入ったのだが、どこに行くのか不明、なぜだか日中の記憶も欠落している。夜十時ごろ、平壤駅（今のピョンヤン）に到着した。日本婦人会による、炊き出しの経木詰

めの弁当をもらい食べる。

八月十四日、夜も白々と明け染めるころ、平壤と鎮南浦の中間の岐陽駅に着き下車する。手配は完全で、地元の朝鮮の老人たちが大勢出迎えてくれた。その場で宿舎の割り当てもさっさと済み、出迎えの人に連れられ宿舎に落ち着くことができた。宿舎は駅から十五分ぐらいの所で、立派なキリスト教会があり、傍らにその人の家がある。教会の付属の建物なのか独立した小屋の、電灯のついていない板敷きの部屋を与えられた。その人は教会の管理人で、当主夫妻と二十歳ぐらいの長男夫婦、小学五年生の次男という家族構成であった。冠木門の入り口脇の表札は、創氏改名による日本名と朝鮮名の両方が掲示されていた。同行の伯母一家三人と、私の一家四人の七人で共同生活をすることになった。米の支給を受け副食物は自弁とすることで、早速、畠に行って農作物を買うべく交渉するも、一応供出制度があるので自由にはならない様子である。なかなか分けてくれず、拝み倒

してやっと手に入れる始末だった。母屋の庭先の竈・鍋を借りて炊事をする。郵便局に行って、一家族三十円までの制限でお金を交換した。当時、日本のお金は朝鮮・満州に、朝鮮のお金は満州に、そのまま等価値で通用していたが、その逆は駄目だった。父と学校に到着地を記して、連絡の手紙を投函するが、結局は配達されなかった。夜は板敷きに持参の毛布を敷き、電灯が無いので早々と就寝した。

八月十五日正午、母屋の縁側で終戦の玉音放送を拝聴する。放送の内容は、私の学力程度では理解することはできなかった。意味不明「何だろう、どうしたって言ったのだろう」と言う私に、母屋の長男が「君の国が戦争に負けたと言ったのだ」と説明してくれた。新聞を見たら所々しか漢字を使ってなくて、見たことのない符号のような文字が並んでいた。「何だ、これは読めないじゃないか!」と言ったら、長男が「朝鮮の文字だ」と教えてくれた。ハングル文字だったのだ。

八月十六日、毎日さしたることもなく学校にも行かず新聞も読まない生活なので、この日以後は正確な日時は不明である。薪を購入しバケツを手に入れ、町中の共同井戸に行つて朝昼夕と生活用水を運ぶのが私の日課となり役目でもあつた。食事は御飯だけを炊き、副食は味噌をなめる程度にした。岐陽の町には日本人は住んでいなくて、夕方は日本人の子供が珍しいのか、集まつて来る現地の子供たちと遊ぶ毎日だった。腕白どもに「日本負けた！ アメリカ勝つた！ ヤーイ！」とはやされてかつかつとする私は、「お前たちも日本人じゃないのか、悔しくないのか！」と怒鳴り回っていた。どういうものか陰悪な空気にはならず、「あいつをからかうと面白いぞ」と、近所の子供たちが押し掛けてきて遊んだり、口喧嘩をしたりしていた。しかし目の前で朝鮮語で内緒話をされると、こんな不都合なことは無かつた。彼らは学校では日本語を、家庭では朝鮮語をを使い分け創氏改名もしていた。

そんなある日、母屋の次男が私に告げた。「朝鮮は独立するのだ！」眉をつり上げ、昂然として誇らしげな態度であつた。「朝鮮保安隊」が結成されて、保安隊本部に日の丸の半分と四隅を黒く染めた旗が立てられていた。墨が滲んで、いたずらにしか見えなかつた。独立の喜びに浸つていたのか、鉄砲を持った衛兵が立ち、こしやくにも長靴を履き使いこなせもしないくせに、軍刀を吊つた隊員が、将校気取りで肩を怒らせて大勢出入りしていた。抗議することもできない私は、悔しくて母屋の長男に訴えた。「負けたからといって、日の丸をあんなにしてい」と抗議したら、「あれは朝鮮の旗だ、今どこに朝鮮の旗があるのだ、どこにもないからああするほか仕方がないのだ」と言われた。それは韓国の「大極旗」だったのだ。

岐陽の町には、少数の日本軍が軍需物資と共に駐屯していたが、二十五日ソ連軍の平壤進駐により武装を解かれ、私らのために木銃を担いで街中を警邏していたのは哀れでもあつた。

民宿滞在中は田舎だからか、水汲みの子供の一人歩きもできたし、何らの迫害を受けることもなく治安は良好で、朝鮮人の床屋にも行った。母屋の人からつきたての餅をもらったり、共同井戸で会う朝鮮の婦人には、水を汲んでくれる人もいたり結構皆親切にしてくれた。朝鮮のお金の持ち合わせが少なく、世話になった母屋の人に謝礼もできずに別れたことが、いまだに残念に思われる。もし簡単に北朝鮮の岐陽に行けるものなら、今からでも謝礼を届けて、彼らの安否を確かめたいと思っている。

八月末ごろ、宿舎近くの田圃の用水路をせき止めて掻い掘りをしていたら、宿舎近くの朝鮮の子供が母に頼まれて呼びにきた。「大変だぞ！お前は収容所に入れられるのだ！」と言う。急いで帰ると、もう支度を済ませた母が待っていた。荷物を持って道路上に整列して、「武器はないか！短刀はないか！」と朝鮮保安隊の荷物検査を受ける。疎開者一同で牛車を雇い、それに荷物を積み

込み収容所に行く。岐陽駅の裏側に鉄道の引込み線があり、数棟の建物があった。敗戦により不要になった軍需工場の工員宿舎に疎開者を集結させ、自主管理の団体生活をするようになったのだ。大釜での共同炊事だが、毎度、しょうゆによる「味付け御飯」で副食物は何も無かった。食い盛りの私は夜食に「お焦げ」をもらったが、食べられるだけでも幸せであった。

九月七日期奉天に帰ることになり、いくらかホッとした。南朝鮮の仁川<sup>ジンセン</sup>まで南下すれば、親戚の者がいると母は言うのだが、我々だけで集団を脱走する勇氣も行動力もなく、狐疑逡巡していた。関東軍や満州国政府家族のように「置いてきぼり」にされて、一年後に、徒歩で三十八度線を越えた人たちから見れば、結果としては満州の父の所に戻れて幸せだったと思う。なぜ満鉄家族だけが満州に戻れたのか、満鉄は敗戦後も必死で汽車を動かす、依然として健在だったことが原因なのかと思う。

九月十日ごろの夕刻、有蓋貨物列車は岐陽をたち、翌朝平壤駅に着く。故意なのか、列車は貨物線に停車する。両側は軍需物資らしき物を満載したままの貨車、シートが掛かり、積荷は不明だが華北交通のマークの貨車が多かった。突然、十数人の朝鮮の子供をお供に引き連れて、ソ連兵がやってきた。腕時計を振りかざして「……」言葉は分からないが意味は分かった。だれも相手にしない。また別なのが来る。「……」取り巻きの子供が若い婦人（この人は夫が出征中）を指さし、「お前、降りろ」と通訳している。車内は一瞬空気が凍りつく感があった。母が末の弟をその人の膝に押しやり、「子供がいるから駄目だ」と朝鮮の子供に言った。貨車に上がってきて実力を行使することもなく、ことは終わってソ連兵は立ち去った。そのすきに、貨車入り口近くの小荷物を制止する間もなく朝鮮の子供らに持って行かれたが、これがプラットホーム横付けだったら何をされていたか分からないと思った。

昼過ぎ、定州駅で保安隊による荷物検査を受けることになった。「敗戦国民は新品は持って行けない！ 新品は没収する！」と言って若い隊員が長靴を履き、邪魔な軍刀を吊って乗り込んできた。私たちの番になり、突然、母が胸を張って「我的有多多小孩、一個兩個三個」と、私ら子供を指しながら「在奉天有姑娘」と捲し立てた。呆氣にとられた保安隊員は、ろくに荷物の検査もせず引き下がってしまった。下車する隊員を見たら、日本手拭を数本手に持っているだけであった。日本人に好意を持つ人なのか、あるいは気の弱い人なのか、今思うとおかしいが、朝鮮人相手に片言の中国語をしゃべっても通ずるわけがない。日本語でしゃべれば相手は分かるのだから、さして考える必要もなかったことなのだが、「女は弱し、されど母は強し」の一幕であった。

その日の夕刻、新義州駅に着く。ホームの反対側に満鉄差し向けの旅客列車が到着待機していた。しかし座席のシートは全部はぎ取られ、スプリン

グがむき出しだった。貨車から客車に乗り換え、鴨緑江を渡り安東駅に着く。朝鮮ではホームに人影も無かったが、安東駅では大勢の日本人がいて、さながら自国に帰ったような気がした。粟御飯の「お握り」が満鉄から支給された。満人の物売りが蒸した薩摩芋や玉蜀黍をここを先途とばかりに売り歩いてた。せいぜい四、五十銭のものを、小学生が百円札を出してお釣りをもらえなかった騒ぎも起こる。当時の百円札はかなりの価値があった。朝鮮では通用しなかったが、奉天をたつ前に一年分の給料を前渡しされて、かなりの額の満州貨幣を百円札で所持していた疎開者なのであった。

父が永年鉄道勤務だったので、知人もいるはずと探してみたら、Aさんがホーム事務室にいた。話によると、「奉天駅前は大変な略奪暴行騒ぎで、無事に通過できない様子だ」と言われた。日が暮れて安東駅を出た。唯一密室のトイレは、水がでなくて排泄物が小山のごとく堆積していたが、落

ち着いて処理できる空間でもあり、ご婦人たちは助かったと思う。

九月十二日ごろの早朝、蘇家屯駅停車中、前の車両で略奪騒ぎが起こっているとかで、一時騒然となる。「列車は、奉天駅手前の南八条通りのガスタンクの所に止まるから、下車せよ」との指示が出る。ガスタンクは、奉天駅南二キロメートルの所にあり企業の社宅街に近かった。さすがは満鉄、智者がいるものだ。下車の支度をして列車がガスタンクに近づくのを待つ。止まると同時に、父や兄の顔が窓越しに見えた。出迎えてくれたのだ。国際運輸の社宅の人たちと別れ、伯母一家とも別れ、我が家族だけで萩町の満鉄社宅を目指す。父の指示で、南八条通りは通らず路地伝いに行く。通りを横切るときは、私は先行してだれもないかを偵察する。どの家も分厚い板を玄関や窓に打ち付けて、無人のごとく静まり返っていた。我が家に到着し呼び鈴を押す。息を潜めて私たちの帰りを待っていた姉が、丸坊主頭の男装姿で出てき

た。風呂を沸かし、一カ月分の垢を流す。このころは都市ガスは止まっていたが、まだ電気も水道もきていた。大変な経験をし、責任も重大であった「朝鮮疎開」は、やっと終わりを告げた。

次兄は、私たちが朝鮮疎開に出発した翌十三日早朝、防衛召集を受け対戦車肉弾攻撃訓練を受けたと言う。その実態は、たこつぼに潜み、兵隊の引く荷車に携帯爆雷に見立てた小箱を抱えて突っ込む訓練で、見戯に等しいことだが、その時にはそれしか対策は無かったというのが実情であった。ソ連軍進駐前に、次兄は召集解除となり帰宅することができた。奉天市内の各交差点などに、対戦車壕を掘り巡らした跡が、兄の証言と舗装道路の壊れからも確認できた。

長兄の所属する第一二六師団第二七七連隊は、牡丹江東北の「八面通」にいた。何回となく、たこつぼを掘りながら転戦、部隊組織を維持しつつ山中を行動し、九月三日山を降り降伏し、それから何十日も歩かされてソ満国境を越え、ウラジオ

ストック東北のアルチョム収容所で炭鉱に入り、石炭掘りの強制労働をさせられたが、若かったからこそ無事に生きて帰れたと、帰国後に長兄は述懐していた。

一般には、邦人保護の任務を放棄した関東軍と蔑さげすまれていたが、牡丹江南方五十キロメートルの地にあった関東軍石頭予備士官学校の「座金の軍曹」たち三千六百余人は、特設連隊四個大隊を編成し、牡丹江市民の避難援護のため、二個大隊が牡丹江東方の磨マトウセキ刀石や掖河に出撃し、敵戦車に肉弾爆雷攻撃をかけ七百余人の学徒兵が戦死したとのことだ。長兄の小学校以来の同級生である、三枝文雄氏もその一人である。彼は中学四年終了から旅順高等学校を卒業し、京都帝国大学入学決定後に現役入隊した、頭脳明晰な春秋に富んだ学徒であった。また掖河では、「第二七八連隊が軍旗を奉焼し玉砕、連隊長は自決した」と、長兄に聞き、書物でも読んで確認した。長兄は、「座金の上等兵」で、もう数カ月入隊時期が早ければ、石頭予

備士官学校に入校していたはずだったと言う。兄や私を含め、当時の若者の運命は、まさに紙一重とも言えるものだった。

#### 四 引揚げまでの生活

私の留守の間、八月二十日にソ連軍が奉天に進駐し、日本軍は武装解除を受け逐次シベリアに強制抑留された。警察官は逃亡してしまったので、治安は極端に悪化した。略奪暴行を繰り返すソ連兵は囚人で編成されていたと聞くが、その質は悪く、大方の日本人は家の玄関や窓に板を打ち付けて立てこもり、外出も自由にできなかった。姉の髪は父が丸坊主にした。「我が娘の黒髪を切る」、このようなことはだれしも経験したくはないことだ。そのとき、「入れた覚えがないのにバッグに、西洋かみそりが入っていた」と姉は言う。たいした武器にもならず、まさかの時の自決用に父が入れたとしか思えない。我が家もソ連兵に入られ、姉は屋根裏に緊急避難し、父や兄は銃を突き付けられて、ホールドアップをさせられた。我が家で

は大した被害は受けなかったが、飼っていた鶏十数羽は全部盗られてしまった。近所の家の主人は、猟銃を持ち出し抵抗したとかで射殺された。

朝鮮から帰ってもしくはらくは籠城生活を余儀なくされたが、九月末ごろ、偵察に出た兄の情報では、中心部の春日町や青葉町では、日本人の露店や屋台が立ち並び賑やかだとのことである。しかし油断はできない、殺されても訴える所の無い無政府・無警察状態が、これから「引揚げ」まですつと続くのだ。

十月八日には、学校再開を口伝えに聞いて登校した。奉天市街の南の外れにあった二中・商業・葵小の校舎はソ連軍が駐屯して使えず、市街中心部の加茂小学校に登校した。そこで目撃したのは、奥地から逃れてきた開拓団の人々の悲惨な有様だった。増える一方の避難民でさすがに校舎は使えず、日ならずして私たちは校舎を追われ、寺院・倉庫と空き家を求めて転々としながらも寺子屋式教育を受けていた。あの混乱の中で教育が

続けられたのは、教育関係者の「滅私奉公」の師範学校精神のたまものと深く感謝している。

十一月二十六日には、大広場の東拓ビルにあった「ソ連軍司令部襲撃事件」が発生し、いとこの奉天商業四年生の正明が参加していた。襲撃後、潜伏していたが連判状が発見され、居住地を包囲された。「出て来なければ、日本人全員を皆殺しにする」と威嚇され、周囲の日本人に及ぶ迷惑は計り知れないので、正七伯父はかくまい切れずに、自ら我が子の身柄をソ連当局に差し出した。長男、次男と兵隊にとられて生死不明のときに、三男を連れて行かれた伯父はノイローゼ状態となり、我が家に来て夜通し泣き明かしていた。正明は昭和三十年にシベリアから無事帰国したが、事件については多くを語らず、苦労が多かったのか五十七歳で亡くなった。

歳末ごろ、南七条通りの遊行寺の境内で目撃したものは、たくさんの土盛塚と、大きな方形の穴に整然と積み重ねられた「ご遺体」であった。そ

れらは、やっと奉天にたどり着いたものの、力尽きて倒れた開拓避難民たちの姿なのである。ご遺体を茶毘に付す燃料はなく、大地は地下二メートルぐらゐまで凍結するので、個別の穴の掘削は不可能なのだ。しかし伝染病の発生蔓延を恐れ、翌年一月末にはソ連軍は長沼公園方面の郊外に墓地の発掘移転を命じてきた。そのため、厳冬の中、凍てつく大地を掘り返して、ご遺体を大車ダイチヤ（荷馬車）に積み込んだ。むき出しのまま積み込まれた「物体」の輸送を目撃したが、その光景は深く脳裏に刻み込まれ、いまだに忘れることができないでいる。

生活面では不要の衣類・道具の処分などに始まり、街頭で売りに立つ母の護衛、荷物持ちなどをした。その後は、兄弟で菓子販売の店を出し、交替で店番をした。店といっても蜜柑箱の上に机のひきだしを置き、その上にガラス板を掛ける程度であった。商品はあんぱん、栗饅頭、大福餅などの菓子類で、早朝凍てつく中を市内の朝市に出掛

けて仕入れた。仕入れ値は一個一円五十銭で、売値二円が相場であった。百個、二百個と仕入れて、甘い物に飢えていた日本人相手の商売は、当初は珍しさもあり繁昌もしたが、暖かくなるにつれ先の見通しの立たないお互いの生活の中で、だれしもが財布の紐は固くなる一方で、商売は閉鎖を余儀無くされた。

十二月ごろから引揚げまでの間、内戦のために電気も水道も来なくなり、二個の一斗缶を天秤棒で担い、手押しポンプのある所から水を運ぶのも私の仕事だった。当時は他人を顧みる気持ちの余裕などは無かったが、出征兵士の家などで男手のない母子家庭では、どのようにして生き抜いたのかなど、今になって思うことである。

開拓団などの難民を救済する居留民会（後に瀋陽日僑善後連絡総処となった）が、いち早く立ち上げられ平安広場の明治ビルに置かれた。在留市民は隣組を通じて使役などの割り当てを受け、内地で償還する条件の下に、一口千円以上の寄付を

求められた。我が家も応分の寄付はしたはずだが、父母亡き今となっては、どの程度であったか詳細は分からない。満州国の郵便貯金は凍結のまま紙切れと化し、満鉄の社内貯金は、父は額面の半額、貯金額の少ない姉は全額降ろせたのは幸いであったが、どこからも収入の当てもなく、「引揚げ」の見通しも立たない状況の中では、だれしもが裸になるわけにもいかず、民会関係者は資金集めにさぞかし苦労が多かったと思う。

隣が満鉄倶楽部で、年末にはテニスコートを駐車場として、ソ連軍の自動車部隊がしばらく駐屯したが、敗戦直後のソ連兵のような略奪暴行騒ぎは無かった。講堂が兵隊の宿舎となり、我が家をはじめ軒並み自宅の二階が将校宿舎として接收されたが、追い出されないだけでも幸せであった。食事の世話はしなくてもよく、我が家にはソ連軍大尉が宿泊した。個人的に接する分には好人物であり、黒パンをくれたり、講堂での写真会によく招待されたりしたが、独ソ戦の映画を見せられて

も、言葉が分からないので困った。小学校の地図を持ち出し、手真似で故郷はどこだと尋ねたりしたが、家族はドイツの空襲でやられたそうだ。我が家には娘がいるので、悪さをされないよう、父は商売女を見付けてきて提供したりもしていた。父母と末弟の三人が在宅時に、施錠も出来ずいたら、白昼、間隙をついて中国人の拳銃強盗に襲われた。幸いなことに、生活の智恵で金は分散して小出ししておいたので、被害は少なかった。

わずかの手蔓を頼りに、父母の所に元日本兵が尋ねて来る。生活に困り何らかの物を持ってきては、金に替えに来るのだ。父母は長男が出征中だったので、必ず「どこにいるのやら」の話になり、最後は情にほだされて、何がしかの金子を出すことになるのだった。そのようにして手に入れた、新品の軍靴に黒の靴墨を塗りさっそうと町に出た三兄は、たちまち日本人の追剥に遭い、厳寒の中をはだして帰ってきた。言葉巧みに路地裏に誘い込まれ、「抵抗したら、命は無いぞ」と脅かされた

らしい。人間、食うためには体裁も、善悪もあつた物ではない。そんな環境下に、親の保護のもとにあつた私ら兄弟は幸せであつた。元日本兵による集団押し込み強盗のうわさもあり、とにかく油断のできない毎日であつた。

##### 五 引揚げ始まる

三月にソ連軍が撤退し、入れ替わりに国民政府軍が進駐してきた。昭和二十一年五月十五日、市民待望の奉天地区の内地への引揚げが開始された。順序は開拓難民・出征軍人の留守家族・病弱者が優先し、在来の奉天市民は後回しだった。

六月、在学証明書をもらい学校は解散状態になる。七月、国民政府軍の使役で、鉄西の工場や東部にある満州飛行機などの工場の片付清掃に従事した。工場の中の機械設備類はすべてソ連軍により略奪され、何も無いのを目撃する。米国製の軍用トラックによる送迎を受け、日当二十五円をもらつた。

八月二十六日、父は三度目の「竈処理」をし、

各人がリュックサック一個を背負い、南八条通りに並んだ大車に乗り込んだ。なぜか近い奉天駅を使用せず、中国側の、往時瀋陽総站といった北奉天駅で無蓋貨車に乗車した。現在の瀋陽北站とは別な場所の駅である。皇姑屯コウコウトンや父が駅長をしていたことのある裕国などを通過した。生僧の雨に濡れながらも「さらば、奉天よ！ また来るまでは……」と皆でラバウル小唄の替え歌を合唱し、元氣旺盛であった。

翌朝、奉天からは二百四十五キロメートルで駅名を「錦縣」と言っていた、錦州郊外の集中営（收容所）に引込み線を通って到着した。往時、張軍閥を駆逐して満州国を建国したのだが、その張軍閥の兵営や馬小屋が、「日僑俘ニツキョウブ」としての「邦人総引揚」のしばしの宿になるとは、歴史の皮肉を感じさせられる場所でもあった。約一週間の健康隔離期間に伝染病の発生が無ければ、無事乗船の運びとなるのだった。

九月三日朝、国民政府軍の手荷物検査を受け、

貨車に乗り約五十キロメートル先の壺蘆島港に移動する。今は葫芦島フールウダウ（瓢箪型に突き出た地形の意味）と書くが、島ではなく地続きである。往時、張軍閥が「日清満州善後条約」でそれまで禁止されていた「満鉄平行線」を敷設し、流通貨物を一手に握り大連港の繁栄を奪い、満鉄の死命を制せんとして建設を始めた港である。そのことが、満州事変発生の最大原因でもあった。埠頭に接岸していた米軍貸与のリバティ型戦時標準貨物船に安東地区からの梯団と合流し、二個梯団三千人が乗船する。毎晩、「慰安の夕べ」が開かれて、船員が今、内地で流行している「赤いリンゴに、唇よせて」の歌詞を紹介しながら歌い、引揚者の中の芸達者が出演して座を賑わせていた。軍歌、「勇敢なる水兵」の一節にある「風も起こらず波立たず、鏡のごとき黄海は……」の歌の文句の通りに船は滑るように黄海を進み食欲も旺盛だったが、名にし負う玄界灘では全員船酔いで私も食事どころでは無かった。

日本の残存艦船は僅少で、軍隊を含め六百三十万人余りの海外総引揚のため、リバティ型貨物船百隻とLST戦車揚陸艦百隻をアメリカから借り、リバティ型貨物船に三千人分の木造の仮設トイレ、船倉の昇降階段、烹炊設備ほうすいなどの居住施設の突貫工事をしたのは、原爆の余燼よじんいまだ冷めやらぬ、三菱長崎造船所であったと書物で読んだことがある。

九月六日博多湾に到着。検疫のため、屈辱的だが全員お尻を出して、ガラス棒を差されて検便を受ける。約一週間の船上生活をして、伝染病の発生が無ければ無事上陸となるのだ。内地は、大人にとつては懐かしい所かもしれないが、満州に生まれ満州で育った私には何の感慨も湧かず、母が語ってくれた「山紫水明」の言葉通りに、緑の多い所だなど思ったくらいだった。

九月十四日博多上陸、一番大事なのは一人千円の制限のある所持金の日本円との交換であった。我が家は合計八千円也だった。これが営々として

築いてきた在満三十余年に及ぶ生活の収支総決算とすれば、さぞかし父母は情けなかったことだろうと思う。

#### 六 戦後の生活

母の郷里、大分県高田町に落ち着いた。幸いなことに、門司の伯父が戦時疎開すべく手当てをした農家が確保されていて、入居することができた。即刻、次兄・三兄は伯父の家で世話になり、働くことになった。姉も製糸会社の寮母になり、半年後には行李一つで嫁に行った。私と弟は県立中学の二年・一年に転入学して学業を続け、長兄は昭和二十二年春、シベリアから割合早く無事に復員した。

満州国成立後に派遣された官吏や大企業の社員は、戻る先が保証されていた人もいるが、満鉄生え抜きの五十歳に近い父には、勤め先が皆無であった。数年間は気が抜けたようであったが、私が高校卒業の二十六年、小さな材木会社に勤めるようになり満鉄の経歴はご破算となったが、七十歳

歳まで勤務をして、わずかながらも厚生年金を受給することができた。

二十六年ごろまでの生活は、赤貧洗うがごしの最低生活で、その間の母の奮闘頑張りには頭が下がる思いである。気位ばかり高い父に仕え、兄たちの仕送りではとても足らず、農業のほか、闇屋や行商の仕事で食糧を手に入れ、さらにはろくな質草のない中での質屋通いもした。母が涙するのを目撃した日もあったが、あの食糧難のさなか、雑炊ながらも三度の飯を私に腹いっぱい食べさせてくれた。「引揚者には、子に残す財産は何もない、せめて高校だけは出ていなさい。社会に出ても何とかなる。後は自分で生きて行け」というのが母の持論であり、口癖でもあった。

幸いなことに、引揚者は中学・高校の授業料が免除となったので、何とか学業を継続することができた。私と弟は、桂川べりの竹藪一反歩（三百坪）を開墾し、山で薪を取り農業の手伝いをし、七島藪の籠作りの内職を手伝い、家計に協力した。

母は四斗樽に味噌も醸造し、井戸釣瓶の縄も綱い、自給自足に近い生活であったと言える。小麦が未加工のまま配給されるので、粉にする石臼は非農家の家庭では生活必需品であった。農作業のときに、喉の渇きをいやすため、母に「某家の井戸水がおいしいから、もらってきなさい」と言われ、やかんをぶら下げて水汲みに行った。そのためなのか、私は百余円の缶ジュースなどが、もったいなくて素直に飲めない性分となってしまった。

田舎の生活について、井戸は庭先にあり、水汲みは子供の役目、竈に煙突はないので煙が家にこもる。母に苦情を言ったら、「井戸は台所近くでは汚水が浸透するから駄目」、「周囲の家を含めてほとんどが藁葺き屋根だから、火事になるのを恐れて煙突は付けられないのだ」と教わった。宇佐・高田間のマツチ箱のような軽便鉄道、電気はメーター器のない一灯だけの定額灯、未舗装の道路、木造の校舎、木造の橋、ゴムタイヤではなく鉄の車輪の荷馬車や大人車、下駄履きの生活、県立中

学校最初の登校の日に靴を履いて登校したら、だれ一人として靴履きの者はいなかった。味噌汁・沢庵の食生活、ろくな医療も受けられずに亡くなつていく年寄りたち、母の生家の伯父夫妻もその典型であり、昭和二十年代半ばに、夫妻とも長患いもせず亡くなった。

そのころの日本の農村の姿には、幻滅を感じさせられた。これが麗しき瑞穂の国、日本の実体なのか、文部省派遣の教師たちが礼賛してやまなかつた「桃・栗・梨がなり、盗人のいない桃源郷」の内地の姿なのか。こんな生活をしながら、アメリカと戦争をしたのか、よく戦争ができたものだ、貧乏だから戦争の道を通つたのかと考えさせられもした。

その後の父母は、土地も手に入れ家も新築することができた。孫十五人にも恵まれ、お墓を造り、奉天砂山納骨堂に放置したままの祖父母の御霊を祭り、東京見物もし、一族全員参加の盛大な金婚式も挙げることができた。

母の晩年は深く神仏に帰依する毎日で、昭和五十六年、満八十三歳で永眠した。兄たちに続いて男は全員家を出たのだが、天の配剤は良くしたもので、子育てを終わつた姉が同居し、脳梗塞で二年間寝込んだ母の面倒を見てくれた。葬儀に際し、宇佐神宮の権宮司から弔電を頂戴した。私は「国破れ満州野が原を追われきて、鋏とりし母に涙し流す」と、腰折れ一首を母に捧げた。

父は平成元（一九八九）年満九十二歳で、姉に看取られ永眠した。両親の最後を看取つてくれた姉には深く感謝する。父は六歳、十七歳、四十九歳と、生涯に三度の「竈処理」を余儀なくされ、裸の出発を重ねた稀有の人生なのだが、万葉集の山上憶良の歌「銀も黄金も玉も何せむに、勝れる宝、子にしかめやも」とあるように、育てる時はさぞかし大変だったろうが、労苦を重ねた父母の人生には、金銭に勝る財産、一姫六太郎がいたのは幸せなことであった。

## 七 回想

黒船来航により泰平の眠りを覚ませた近代日本は、多くの犠牲者を出しながらも幕藩体制を廃し維新回天の作業を終え新政府を樹立した。明治大正と激動の昭和の御代<sup>みよ</sup>までの我が父祖三代を回想してみるに、曾祖父は獄死し、祖父は戦傷による身体障害者、父は生涯三度の竈処理と、まさに近現代史に翻弄された篠崎家の悲劇は三代で打ち止めとし、幸いにも私の人生は古稀を過ぎ平和を謳歌したまま終わりを告げんとしている。

昭和天皇の御仁慈溢れる非常の措置をもつて、本土決戦を呼号する陸軍を抑え、時局は収拾された。御聖断によって、奉天における玉砕の市街戦は回避することができて、我が家は戦争の惨禍を免れ、家族全員生命を全うすることができたのであった。もっと早くに戦争を止めておけばの説もあるが、全国民を巻き込み徹底抗戦を叫ぶ陸軍を抑えて、あれが精いっぱい<sup>せい</sup>の天皇の賢明なる「非常の措置」であったと思う。終戦が早ければ、満

州での犠牲者も出なかったと言う人もいるが、そのソ連に和平の仲介を依頼していたのだから、早ければ早いだけ、ソ連軍がそれに合わせて早期に侵攻して来る。どう転んでも、あの時点における火事場泥棒のソ連軍の満州侵攻は避けられなかったことと思わせざるを得ない。

「国破れて山河有り、城（街）春にして草青みたり」帰るべき祖国、受け入れてくれる祖国のあったことにしみじみと幸せを感じている。当時は子供で、その後所帯を持ち子を持って改めて、私は父母の嘗めた辛酸をしみじみと回想している。俗に「若い時の苦勞は買つてもせよ」と言う。「家貧にして孝子<sup>あやむ</sup>顯る」人間苦境に育てば「報恩感謝の精神」が身につく、姉兄弟揃って親孝行であった。今の「暖衣飽食」の世に育つ人間、必ずしも幸福とは言えないのかもしれないと思う。

朝鮮疎開や敗戦後の奉天で体験したことを、国策のもと、二十七万人の内、八万人に及ぶ「墓標なき死者」を出した北満の開拓団の逃避行と比較

するとき、天地雲泥の差があるのには肅然しゆくぜんとして襟を正すのみである。あの未曾有の動乱の中、鮮満の地において、非命に斃たおれ非業の最期を遂げられた幾多の人々には、大變申し訳のないことであつたと思う。謹んで哀悼の祈りを捧げ、御霊安かれと祈る日々である。五十九回目の終戦記念日を迎え、平和と国防・国益について考えること多き毎日である。

この拙き手記を慈愛深き亡き父母の御霊に捧げる。

敗戦がもたらした出会いに  
生かされて！

東京都 遠藤 節子

一 北京への道

私の父は明治十七（一八八四）年に京都郊外の造り酒屋の長男として生まれ、明治三十七、八年の日露戦争に従軍し、激戦だった旅順戦にも参加したが、英語が話せたので、専ら後方活動に任じていて無事復員し、その後直ちに渡満して日本の租借地となった関東州の旅順都督府に勤務した。まもなく中国語研修を命ぜられて北京に留学し、その後、奉天警察庁に転出したが、思うところがあつて辞職。朝鮮総督府の要請で鮮満国境の新義州警察学校教官に就任した。

母は明治二十九年に相馬藩士族出の岡田某の次女として生まれ、高等小学校卒業後、福島県の教員養成所を出て小学校教員として勤めていたが二